

● 正誤

この語リ物の譯はなかく面白、が、校正の杜撰なるには驚く。柳と柳が柳になつて居たり、(三十三間堂)三年越で十二月であつたり(國性爺)其の外にも澤山を誤字があるがそれは活版の誤植と云へば罪は輕いが、木版の山の段の懸合の圖が、妹山と脊山と、轉動して居る如きは、校正係の責任問題で、實に太宰ではない大罪だよ「へい」それを就いては、私共校正係一同の者は、いづれ大目玉頂戴の事として、大判事ではなく、おぼあんじで居ります。

● 廿四孝 君は近頃三味線の稽古に熱心して居ると聞いたが「行水の」位かな「行水の」シヤランか、遠の昔サソレは感心、それでは今は「今、今は流れど、テレハン、さ ● 相引 君は相引を忘れたでないか、サソ語りにくかつたであらう「ナニ忘れたでないよ、尻をもち上げたら、客へ失禮であらうと思つて。 ● 彌助 君の寺子屋では、前の三高地運は泣いた子「その答と僕が出る前に山葵のドツサリ遣入つた、鮓を二重贈つて置いたもの。

● 重い物 君は昨夜師匠に大小言を聞いて居たが、なんであんなにカスを喰ふのた「フムあれが、アレは砲兵工廠へ見物に行つた話よ「夫れには、だいな力の遣入つた云ひ方であつた子「そうさ、テツやナマリのはなしだもの。 ● 修行 これまでの稽古本は五行であつたが、今度出版になつた「きりかれば本は四行になつたが、コレは毫し贅澤な譯ではないか「ナニ一あれは藝道を熱心に、修行(四行)せよと云ふつもりサ。(島の其右衛門、稿)

● 義太夫を嫌ふものか「ハテナ「實は君の聲を嫌ふのだ。

語リ物の譯後跋

名門二ノ傳

鶴澤秀作(後ニ名門二)ハ、名古屋ノ人。父ハ鶴澤大所トテ、名古屋ノ豪商ニテ、酒造ヲ業トシ、門前町二丁目ニ住セリ。性、義太夫ヲ好ミ白兔門下ノ高足ニテ當時、旦那藝トシテ斯界ニ名有リ。即、是、さらかねサンノ初代ナリ。

秀作幼ニシテ、三絃ヲ竹本土佐吉、鶴澤猪之助、花澤榮二、野澤源平(知友)野澤玉三郎等ニ學フ。後、京都ノ鶴澤伊八郎ノ弟子トナリ、苦學スル事數年、藝ヤヤ熟セントシテ師弟隙アリ。蓋、秀作、或時酒興ニ乗シ、左三味線ヲ彈ク 左三味線トハ胴ヲ左ノ膝ニ乗セ棹ヲ右手ニ執リテ彈コレ一種ノ曲彈ナリ 伊八郎コレヲ見ルヤ、面色ヲ變シ、大喝シテ曰ハク「斯ル小些事、素ヨリ執ルニ足ラチ、斥、サレバトテ、吾カ道ノ爲ニ、コハマヲ見遁スベカラザル惡戯ナリ。以後、屹度謹ミ、斯ル戯ナスベカラズ」ト、辞色最、嚴

シク訓誨ス。後、秀作、竹本和國太夫ノ大道具音曲入ノ藝風ニ心酔シテ、自、賢女鑑片岡忠義ノ一段ヲ仕組ミ、之ヲ師ニ示シテ、添刪セラレン事ヲ乞フ。伊八郎コノ時、憤然トシテ大ニ怒リ「和國ハヨクタナリ、ケレンナリ、和國ノ如キケレン節ハ、吾ガ本行ニ執ツテハ外道ナリ、惡魔ナリ。斯ル邪道へ踏ミ入り、斯ル事ヲ企ツル者ハ、吾ガ門人ニアラズ、弟子ニアラズ、以後謹マザレバ再、吾ガ門ニ入ルニ許サズ」ト、例ノ氣質ナレバ、叱責スル事頗、酷。秀作モ亦剛直、敢テ師ノ叱責ニ伏セズ。論争スル事三四回。師ハ弟子ヲ伏スル徳ナク。弟子ハ師ニ順スル情ナク。反目ニシテ袂ヲ分ツ。何ソ師弟ノ情誼ノ斯クノ如ク薄キヤ。秀作茲ニ至ツテ感スル所アリ。斷然撥ヲ捨テマタ三味線ヲ膝ニ載セズ。爾來曆ヲ代フル事廿四五、明治三十五年ノ一月、秀作、友人三四輩ト共ニ島原ノ輪違屋ニ遊ビテ、偶、舊師伊八郎ガ島原ニ寓居

シ、病ニ臥シテ在リト聞キ、直ニ行キテ安否ヲ問ヒ舊情ヲ温ム。伊八郎ハ京都ノ人ニテ、三十七年ニ死去セシ、名人豊澤廣助ノ實兄ニシテ、初、市藏マタ時造、壽鳳ノ名アリ。後、伊八郎ト更ム。本名ハ栗原源兵衛。性、頑強、人ニ容レラレズ。斯界有數ノ名手ニシテ而モ、名勢共ニ弟ノ廣助ニ及バズ。京都ニ住シ、生涯稽古屋ヲ以テ碌々トシテ渡世ス。三十六年二月、京都島原ノ寓居ニ死ス。年八十。法名ハ本鶴院宗三日弦信士。墓ハ上京御前通り鍋町上ル宥清寺ニ在リ。伊八郎自筆ノ一代記一冊ト形身三味線一掉名門ニ秘藏ス

昨年、其中堂ヨリ、新四行、段落附ノ稽古本ヲ發行セントスルニ際シ、堂主ハ秀作ヲモツテ、萬事ノ監督者ヲラシメント。禮ヲ厚クシテ之ヲ招ク。秀作、其ノ任ノ重キヲ恐レテ、固辭スル事數回。漸ニシテ諾ス。而シテ今モ尙名古屋門前町二丁目ニ住スルヲ以テ、假ニ名ヲ名門ニト更メ、從事シテ今日ニ至ル。蓋、名門二ノ

藝名ハ秀作、マタハ、其太夫ニテきらかねトハ、ソノ通稱。其ノ他  
 實名ノ外、著書、著述、物ニ觸レ時ニ由リテ、多種多様ノ變名アリ  
 其ノ一二ヲ云ハ、島田春作、島の其右衛門、雲母如星、在六居士  
 異風堂道足、紫蘭亭、薄泥庵幽靈子、無常庵、習書局主人、一二三樓、  
 甫(マダ有ル)等ニテ實ニ、多名ナ人デ有ル。多名ハ多名ナレドモ  
 有名デモ知名ノ人物デモナキハ面白シ。  
 以上ハ、名門二ノ藝歴ノ一斑ニテ。誤ル所ナカルベシ。然シ万一  
 ニモ誤傳アラハ、ソハ拙者ノ名前ニ免シ。ごれうけんくたさい  
 ト爾云。

辱知 悟了軒管齋 誌



告廣の本ねからき

鶴澤名門二 立按 (無着、木の葉、浪越、岡福等諸先生の筆)  
 大字新巻五  
 石州生紙大形(中五寸五分) 粹な製本表紙附、各壹冊

床本として仙花摺、美濃紙摺も  
 出来ます。○仙花は一枚壹錢八  
 厘、書院一枚壹錢三厘、美濃紙  
 一枚壹錢の割。○表紙は仙花にて  
 仕立代共壹冊に付六錢てムリ升

- 沼津 ● 鈴ヶ森 ● 日吉 ● 琴責 ● 二度目 ● 以上金廿五錢(郵税四錢)宛
- 八陣 ● 紙治 ● 嫁威 ● 陣屋 ● 玉三 ● 三代記
- 野崎 ● 御殿 ● 辨慶 ● 廿四孝 ● 宿屋 ● 千兩幟
- 新吉原 ● 酒屋 ● 太郎 ● 逆櫓 ● 以上金三十錢(郵税同上)宛
- 鳴戸 ● 合邦 ● 猿廻 ● 帶屋 ● 阿漕 ● 寺子屋
- やなぎ ● 袖萩 ● 瀧 ● 以上金卅五錢(郵税六錢)宛

きらかね本發行元 其 中 堂 書 店  
 名古屋市門前町二丁目(電話八七四番)

この「さらかね本」は大字四行にして各人物の詞と地合とに文字さ切り段落を附け地と詞との區別または、人物の意氣性格を判然とす本文こそ訂正せざるも、用字假名遣ひは素より、章句の如きも皆悉く誤謬を正したり●其の上、巻首には、一段毎に、「解題」ありて○丸本の仕組并に批評○作の年月○作者の姓名○場所と時○登場人物(人形)の頭數并に年齢○文句の解○太夫方及び稽古の心得○「諸人愛敬、藝連長久」の九字の秘傳等總て斯道有益の文字を連記す。これ實に前代未聞の新意匠大發明なり●目下尤も世に用ゐらるゝものを選びて、前記三十段發賣す●尙○松王屋敷○中將姫○新口村○本藏下屋敷○又助○蝶八○志渡寺○質店○すしや○三日の十段を近々刊行して漸次、「淨曲百段」の實を満さんとす●本書一度出づるや、淨瑠璃と文藝(東京)淨るり雜誌(大阪)等の専門雜誌は素より、著名の大新聞が各筆を揃へし如き多大の好評を受けたり。されば斯界の重寶として愛玩せらるゝ事深く、使用の流行は全國に普からんとせり。希くば新道熱心の諸君、是非共將來はこの「さらかね本」を採用し早く上達なし給はん事を。

其 中 堂 營 業 案 内

●其中堂は「さらかね本」の發行元のみでない●和漢内外の古本問屋で常に幾万種の古本を蓄積して、顧客の求めに應ず。毎年發賣書目を發行して花主方の便利を圖る。この其中堂發賣書目は、郵税二錢送られなは、誰方様へでも無代價で進呈す。されは古本の買方入には頗る勉強。直は高く深切にて、數千數万圓の品でも現金にて取引す●佛教書籍御經類は云ふ迄もなく古來の老舗で、小は心經より、大は般若經の出版元で、佛教の本ならなんでも來いである。加ふるに謠曲書類は諸流の一手の販賣店で、實に比類なき勉強店なり●以上は弊店の専門營業。希くは多少に不拘御用仰せ付け被下度候

名古屋市(電話、八七四番) 其 中 堂 書 店  
門前町三丁目